



Title	2024 年度（通年） 日本語2 実践報告
Author(s)	サンジャヤ, ソンダ
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 42-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102677
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度（通年） 日本語 2 実践報告

サンジャヤ ソンダ

1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度の日本語 2 の授業実践の報告である。日本語 2 は春夏学期と秋冬学期に分かれている。春夏学期は基本的なアカデミックリーディングに関する教科書や様々な記事、調査結果、論文をメイン教材とし、外国人日本語学習者から見た日本語、日本の社会・文化、日本語教育に関わる問題を中心に扱った。読んだ内容に関する自分の意見や考えを他者に合理的に分かりやすく伝えるといった、アカデミックリーディング及びクリティカルシンキングの能力を身につけることを到達目標とした。秋冬学期は、学習者が興味を持つ新聞記事や論文についての発表やディスカッションを行った。

2. 学習目標

- ① アカデミックリテラシーに関心を持つ
- ② アカデミックリテラシーの大切さへの意識を高める
- ③ アカデミックリーディングを理解し、能力を高める
- ④ クリティカルシンキングの能力を高める

3. 教材選択について

春夏学期の前半は、『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』という教科書を使用した。後半は、グループを決め、グループで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち関係のある 1 つの新聞記事又は調査結果を探し、要約したものを発表してもらった。

秋冬学期は、ペアを決め、ペアで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち関係のある 2 つの論文を選択し、要約したものを発表してもらった。

4. 授業の進め方

4.1 春夏学期の授業について

【授業の進め方】春夏学期の前半は、『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』を使用した。毎週この教科書の課を 2 つ分扱った。教科書に従って文章を読んだ後、練習をした。最後に、授業当日

にクラスで読んだ文章や習ったことに関する意見や感想を CLE に書かせた。春夏学期の後半では、グループを決め、グループで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち、それらの分野に関係があって受講生の興味のある新聞記事又は調査結果を探し、まとめたものを発表してもらった。発表後は、ディスカッションをした。ディスカッションでは、グループ発表後に質疑応答を行った。時間があつた場合は、発表した新聞記事又は調査結果についてのコメントや感想を CLE に書いた後、ディスカッションする形式で授業を進めた。

【毎週の課題】使用教科書にある文章や習ったこと、発表した新聞記事又は調査結果に関して、コメントや感想を CLE に送る。(14 回程度)

【学期末課題】個々の受講生が授業の後半で発表した内容について、自分の意見や感想を学期末エッセイとして提出。

4.2 秋冬学期の授業について

【授業の進め方】秋冬学期は、ペアを作り、ペアで日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち、それらの分野に関係のある 2 つの論文を探し、発表した後、ディスカッションを行うというような流れで授業を実施した。選択する論文は 2 つあるが、2 つは異なる分野の論文に決めなければならないことにした。1 回目の発表は前半の授業で、2 回目の発表は後半の授業で行なった。発表では選択した論文を要約したものを発表した後、質疑応答をするという流れで行った。その後、発表した論文について意見や感想を CLE に書いた後、受講生みんなが口頭で述べる機会を設けた。

【毎週の課題】発表した論文に関してコメントや感想を CLE に送る。(14 回程度)

【学期末課題】個々の受講生がペアで発表した内容(2 つ)について自分の意見や感想を学期末エッセイとして提出。

表1 授業で扱ったテーマ

回	内容
1	オリエンテーション (春・夏学期)
2	①構造：文章の構造 段落内の構造 ②構造：中心文 支持文
3	①構造：アウトライン 論理の構造分類 ②構造：定義
4	①構造：経過 ②構造：比較・対照
5	①構造：原因・結果 ②構造：位置
6	①構造：列挙・順序 ②構造：理由・根拠
7	構造：筆者の意見を表す表現
8	講師による発表 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
9	グループ発表1 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
10	グループ発表2 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
11	グループ発表3 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
12	グループ発表4 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
13	グループ発表5 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
14	グループ発表6 ①新聞記事・調査結果・データを読む ②ディスカッション・発表
15	学期末エッセイ提出
16	オリエンテーション (秋・冬学期)
17	講師の発表 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
18	グループ発表1 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
19	グループ発表2 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表

20	グループ発表3 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
21	グループ発表4 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
22	グループ発表5 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
23	グループ発表6 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
24	グループ発表1 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
25	グループ発表2 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
26	グループ発表3 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
27	グループ発表4 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
28	グループ発表5 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
29	グループ発表6 ①日本語学に関する記事・論文の 概要を読む ②ディスカッション・発表
30	学期末エッセイ提出

5. 受講生の反応と今後の課題

今年度の受講生は、中国語母語話者が7名、韓国語母語話者が3名、トルコ語母語話者が1名、ビルマ語母語話者が1名の合計12名であった。

春夏学期の前半では、教科書に沿って、文章の構造、文章の読み方などを学んだ。文章の内容も理解しやすいものから複雑なものを読んで、受講生は文

章の内容だけでなく、自国の文化から観た意見も述べていた。

春夏学期のグループ発表では、個々のグループが選んだ新聞記事やある調査結果について発表することになっていたが、ほとんど全てのグループが論文や論文にあるデータについて発表していた。全てのグループが発表の準備もきちんとされていた。また、日本語学・日本語教育・日本社会文化に関する論文又は論文にあるデータで、受講者が発表に選んだ論文のテーマはどれも興味深いものであった上に、本授業の計画の内容より難いものであったが、全てのグループがわかりやすく面白く発表することができた。発表後は、挙手し、質問したり意見を述べたりする学生もいれば、CLE に意見や感想を記入した後、ディスカッションの時間に発表のフィードバックをする学生もいた。このように、受講生は皆、春夏学期の授業の全てを積極的に受けていた。

秋冬学期の授業では、一学期中に、ペアで日本語学・日本語教育・日本社会文化に関する論文に関して発表する形で授業を実施した。各ペアが2回発表し、1回目の発表は秋冬学期の前半で、2回目の発表は秋冬学期の後半で行った。受講生が選択した論文は、日本語母語話者の若者の言葉や外国にルーツを持つ人への日本語教育の支援、アニメのキャラを使用することによる地域の活性化といった日本語学、日本語教育、日本社会文化に関する様々な興味深い論文を発表していた。どのペアも準備がきちんとされており、わかりやすく発表することができた。秋冬学期にも、発表後に、挙手し、質問したり意見を述べたりする学生もいれば、CLE に意見や感想を記入した後、ディスカッションの時間に発表のフィードバックをする学生もいた。

春夏学期と秋冬学期の授業のプロセスを全体的に見ると、受講生は皆、自分の考えや意見などを述べたり、受講生間で意見の対立があったとしても良い態度をとったり、大変積極的に受けていた。

今後、本授業の受講生が日本語学、日本語教育、日本社会文化の様々な論文の内容の理解力を高めることだけではなく、それらに関する論文講読により興味を持ち、クリティカルシンキングの能力の向上に役立つことを期待する。

【参考文献】

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2018) 『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』アルク
- 阿藤誠 (2017) 「少子化問題を考える一少子化の人口学的メカニズムを踏まえつつ」『医療と社会』27(1), pp. 5-20
- 関崎博紀 (2016) 「接触場面初対面会話における話題スキーマー日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31, pp. 17-32